

1 当院における血液培養から分離された
2 溶血性レンサ球菌の臨床細菌学的検討

3
4 野本さとみ 秋葉容子 駿河洋介
5 (千葉市立青葉病院 臨床検査科)

6
7 【目的】 溶血性レンサ球菌は主に A 群と B 群が重
8 要視されてきたが、近年 C 群および G 群による侵襲
9 性感染症例の報告が散見され問題視されている。今
10 回、当院で血液培養から分離された 溶血性レンサ
11 球菌について臨床細菌学的に検討したので報告する。

12 【対象および方法】2003 年から 2011 年までの間に、
13 血液培養から分離された 溶血性レンサ球菌 50 例
14 を対象とし、生化学的性状および薬剤感受性につい
15 て年次的に検討した。併せて、臨床背景、疾患名お
16 よび基礎疾患の有無等の臨床データについても解析
17 した。

18 【結果】分離された 溶血性レンサ球菌の内訳は、
19 GAS7 例 (14%)、GBS19 例 (38%)、GCS4 例 (8%)、
20 GGS20 例 (40%) であった。年次別では、2007 年ま
21 では年間 5 例以下であったが、2008 年 6 例 (GAS1、
22 GBS4、GGS1)、2009 年 9 例 (GAS1、GBS3、GCS2、GGS3)
23 と増加傾向を示し、2010 年 5 例 (GBS2、GGS3) と少
24 なかったが、2011 年は 14 例 (GAS2、GBS2、GGS10)
25 と多く、その 7 割が GGS によるものであった。薬剤
26 感受性では GAS2 例、GBS2 例、GGS5 例でマクロライ
27 ド系薬に耐性が認められた。

28 疾患で最も多かったのは蜂窩織炎で 15 例 (30%)、
29 次いで呼吸器系疾患 6 例 (12%) であり、基礎疾患
30 を有していたのは 29 例 (58%) と全体の半数以上で
31 あった。患者の平均年齢は 65 歳と高齢であった。

32 【考察】 溶血性レンサ球菌による敗血症はここ数
33 年増加傾向を示し、特に従来病原性が低いとされて
34 きた GGS が高頻度に検出された。今後重症感染症を
35 起こすと言われている SDSE を含め、本菌の動向に注
36 意していくことが必要であると思われる。